



営農情報

第65号 平成29年11月1日

「あまおう」11月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

1 生育状況

現在（10月下旬）の生育は平年並～やや遅い傾向です。2番果房の分化は、1番から2番の果房間葉数が9/14まで定植作型で4～6枚程度、9/15～9/18定植作型で4～5枚、V型・普通促成（9/19～）で5～6枚で分化しています。一部で早進株も見受けられます。

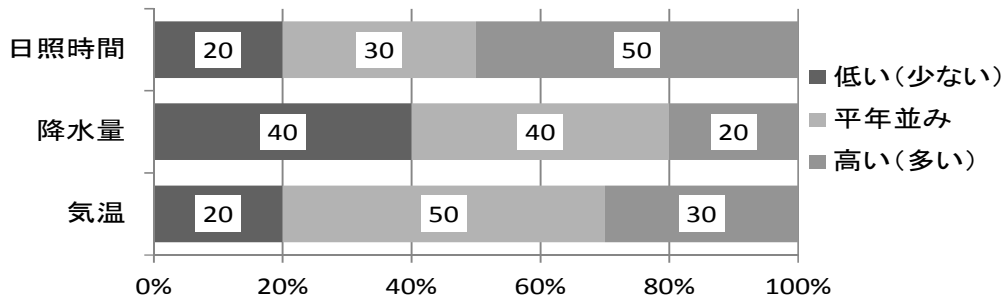
炭そ病による枯死が散見されており、11月下旬にかけて潜在感染株の枯死が懸念されます。また、10月はハスモンヨトウによる食害が多く、引き続き注意が必要です。

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

●1か月予報（九州北部地方 予報期間：10月28日～11月27日 発表日10月26日）



(2) 今後の見通し

11月の気温は、平年並みとなっています。以下のことが懸念されますので、適切な管理を行いましょう。

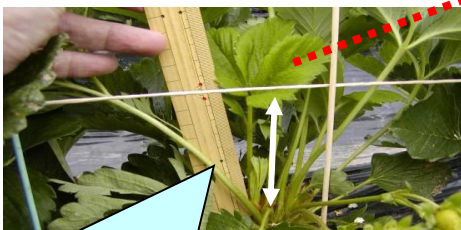
[懸念事項]

- ① 株の急な立ち上がり
- ② 高温障害の発生
- ③ 灰色かび病の発生

[対策]

- ① 早過ぎる電照開始やハウスの閉め込みは、株の徒長の原因となる。適期管理を徹底する。
- ② ハウス内の適正な温度管理の徹底
- ③ 降雨前の防除。換気による過湿の解消

電照管理



心葉の葉柄長を見てください

【心葉展開時の葉柄長による草勢判断】

草勢	弱い	適切	強い
心葉の葉柄長	9cm以下	9～12cm	12cm以上



電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く
------	-------	------	-------

電照管理

11月は1番果房の着果負担がかかるため、“成り疲れ”させないように草勢を維持（心葉展開時の葉柄長により判断）することが重要です。

- ・電照は、11月10～15日から1～2時間で開始し、その後は、心葉展開時の葉柄長を目安に時間を調節する。ただし、頂果がすでに着色期の場合は、着果負担が大きくなっているため11月5日頃から開始する。株が小さく、生育が遅れているほ場（特に普通作型）では早めに電照を開始する。

※電照効果は1週間～10日後に現れるので、着果負担など生育を予想して時間を調整する。

※11月中旬頃を目安に、3番果房の花芽分化期と考えられるため、生育旺盛になりすぎないように注意する。

温度管理

- ・頂果の状況に応じて、温度管理を変える（下表）。特に白熟期以降は低めの温度管理とし、果実肥大を促し品質向上を図る。
また、株が小さく生育が遅れている場合は、高めの温度管理を行い生育を促進する。
- ・外気の夜温が10℃を下回るようになったら（通常11月上中旬）、ハウスを閉め込む。ただし、ハウスを閉めこんだ後に夜温が10度を上回る場合は、夜間ハウスを開放する。

【 1番果房の生育状況別温度管理の目安 】

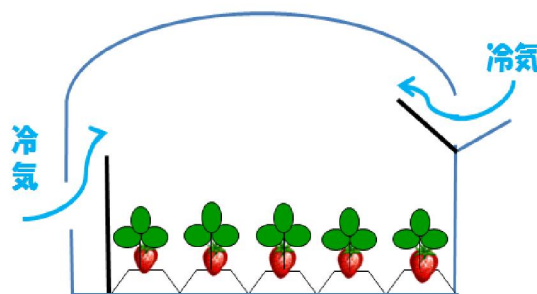
頂果の状況	昼間	夜間
～着果期	26～28℃	10℃
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃

○加温機の準備

- ・加温機は早めに準備し、使用前には点検・清掃を行い、急な冷え込みに備えておく。

○ハウスの保温性向上

- ・ビニルは、破れや隙間がないか点検、補修する。
- ・株に直接冷気が当たらないよう、谷やサイドに冷気よけのビニルを張りワンクッション換気を行う。



保温力向上と冷気侵入封鎖にサレ作の内カーテン設置



ハウス谷部からの冷気侵入対策

（裏面へつづく）

摘果

- ・摘果は、2番果房が出蕾した後、生育状況に応じて行う（下表）。
- ・1～2番の果房間葉数が2枚以下の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を行い、2番果房と合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。
（着果数が多い場合、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。）

【 1番果房の摘果の目安 】

1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の摘果の目安	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

かん水・液肥

- ・かん水や液肥は、草勢が低下しないよう定期的に行う。
- ・かん水の目安として、pF値1.7～1.8で管理する。ハウス内の極端な乾燥は、生育遅れとハダニ類多発の原因となる。
- ・液肥は、窒素成分で月に1～2kg/10aを、2～3回に分けて行う。
（液肥開始の目安 早期作型：収穫始め、普通期作型：着色始め）
生育が悪い場合は早めに施用を始める。
- ・収穫期間中のかん水は、収穫後に行う。

玉出し・わき芽除去

- ・頂果の着色が開始する前までに、軽く玉出しや葉よけを行う。あまおうは果梗が折れやすいため、作業の際は果梗が折れないよう注意する。葉が裏返るほどの葉よけを行うと、光合成の効率低下や株にストレスがかかるため、果実に葉が被らない程度に軽く行う。
- ・玉出し作業と同時に、わき芽やランナーを除去する。

発根促進

- ・開花後は、根が弱くなるため“成り疲れ”の原因となる。発根促進剤（チャンス液、パフォーマンスソイルなど）を活用し、できるだけ多く発根を促す。

病虫害対策

【 うどんこ病 】

- ・ビニル被覆後は特に発生しやすくなるので、定期的に農薬の予防散布を行う。
- ・軟弱徒長にならないよう、極端な多肥や蒸し込み管理を避け、換気を良くする。
- ・発病を確認したら発病葉・発病果は速やかに除去し、多発ほ場ではやや低めの温度管理とする。

【 灰色かび病・菌核病 】

- ・一度発病すると防除が困難であるため、定期的に農薬の予防散布を行う。
- ・発病果実や発病葉は、見つけ次第除去する。
- ・ハウスの換気を十分に行う。

【 ハダニ類 】

- ・葉裏にしっかりと薬剤がかかるように、丁寧に散布する。
- ・一番果房収穫後の防除を徹底する。

【ハスモンヨトウ】

- ・年内は、定期的に防除を行うようにする。

【スリップス類】

- ・年内に飛び込んできたスリップスを防除し、ハウス内で越冬させないように注意する。

【アブラムシ類】

- ・ほ場周辺の雑草の除去を行う。

農薬の安全使用を徹底しましょう！

特集「ハウスを閉めこむのは、外気温が10℃を下回ってから」

H28年産の年内収量が伸び悩んだ要因のひとつとして、果実の小玉化が挙げられます。果実の肥大は温度に強く影響を受け、高温で管理すると小玉となり、低温で玉伸びします。昨年(2016年)の11月の外気温を振り返ると、上旬には一時的に温度が低下していますが、その後、温度が上昇し、夜間ハウスを閉めこむタイミングと言われている外気温10℃以下となったのは、11月下旬以降でした(下図)。結果的に、11月下旬以降にハウスを閉めこめばよかったことになるのですが、皆さんのハウス閉め込時期はいつ頃だったのでしょうか？早過ぎるハウスの閉め込みが果実の小玉化を助長したのではないのでしょうか？

実は、果実の小玉化以外にも11月の高すぎる温度管理には以下のようなデメリットがあります。このことを踏まえた上で適正な温度管理に努めてください。

< 11月の高すぎる温度管理によるデメリット >

- ① 果実の小玉化
高温により果実の成熟期間が短くなり、肥大不足となる。
- ② 株の徒長
温度が高いと株は軟弱徒長となり、根量も増えにくい。
- ③ 不受精果(先詰まり果)の発生(右写真)
昼間の高温で、花が正常に形成されず不受精果が増える。



写真. 先詰まり果

ここ数年、11月が高温傾向で推移している年が多いです。

ハウスを閉めこむタイミングは時期ではなく、外気温が10℃を下回ったかどうかで判断しましょう！！

※ただし、ヨトウムシ類等の対策として、防虫ネットの被覆と薬剤による防除は徹底しましょう。

